

ことは争はれない。従つて論者は宋の衰弱の理由をこれに歸し、非難を加へるのであるが、これは武禍を除いて國礎を固めようとした宋の國初の大方針との間に免れることのできない矛盾に外ならぬのであつて、何れが宋の國力を保つ道であつたかは容易に定め難い。

しかし兎も角もこれ等北族の侵入は、勢威の上にも財政の上にも、宋をして漸次萎靡して振はざる境に陥らしめたことはいふまでもない事實であつて、これが回復の爲に神宗の大改革が企圖せられ、王安石の活動を見るに至つたのであるが、その結果は不幸にして法黨の争を演出し、益々國力の衰退を現はし、遂に靖康の難を招致することになつた。王安石の改革の目標が奈邊に在つたかを問はず、改革の企は要するに富國強兵の實を擧げ、國威を振張し、外侮を防ぐことを目的としたものであつたことは明らかである。當時外敵の主なるものは契丹・西夏であつたがやがて女眞が勃興し、契丹に代つて一層大なる迫力を以て宋に對した。従つて契丹・西夏・女眞等の活動は宋にとつての大問題であつて、主なる國政の方針が常に少くともこれを顧慮して割出されたものであることを認めなければならぬ。かくまで大勢力を發揮した北族は、女眞について蒙古の出現するに及び、遂にその極盛期に入ることとなつた。

## 元 時 代

### 北族勢力の極盛期